メルボルンの高齢女性のパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポート

岡山大学　野邊　政雄

１　目的

メルボルンの都心に近い郊外にある G 市で 2005 年と 2006 年の 7 月と 8 月に調査を実施した. この報告の目的は，そのデータを分析し，パーソナル・ネットワークとソーシャル・サポートの特徴を明らかにすることである.

２　方法

センサスで結果が公表される最小の地域は Collection District(CD)である. 2001 年のセンサスの結果からそれぞれの CD にいる 65 歳から 79 歳の女性の人数が分かる. この情報を用いて，できる限り無作為になるように回答者を選んで，398 人に対して個別面接調査を実施した. なお，モナシュ大学の倫理委員会の審査を受けて，調査を実施した.

３　結果

（パーソナル・ネットワークの構造）①高齢女性はメルボルンの内部で大部分の社会関係を取り結んでいる. ②パーソナル・ネットワークは親族関係と友人関係が中心である. ③5 キロ圏内で平均 1. 37 の親族関係を保有している.

（10 代をすごした場所別に見る，パーソナル・ネットワークの構造）①非英語圏の外国出身者は，近隣関係や友人関係が少なく，パーソナル・ネットワークの規模が小さい. ②非英語圏の外国出身者は，近くで社会関係を取り結ぶ傾向がある.

（子どもの居住場所）①10 代をすごした場所がどこであっても，高齢女性には，同居子あるいは５キロ以内に別居子がたいていいた. ②非英語圏の外国出身者の場合，すべての子どもが近くに集中して住む傾向があった. このことから，上述のようなパーソナル・ネットワークとなったと解釈できる.

（ソーシャル・サポート）①大部分の状況で，親族が最も有力なサポート源である.②大部分の高齢女性はサポートをいずれかの相手に期待できた.

４　結論

以上から，次の２つの結論を得た. ①子どもと同居する高齢女性は少なかったが，子どもと同居していない場合でも, 別居子のうちの少なくとも１人は５キロ以内の場所に住んでいた. ②非英語圏の外国出身者は社会的に孤立する傾向があった. そのことを補完するために，すべての子どもが近くに集中して住む傾向があった.